

## 「新潟の子どもと教育を考える会」報告

小野塚 恒 男

本年10月29日（日）午前、「新潟市総合福祉会館」で標記の会が開かれました。

司会者は最初に、「お互いに知り合って、情報交換をしようの最初のスタートです」とあいさつしました。

つづいて、自己紹介がありました。

大学の先生は、教員をめぐる厳しさについて、「学校の外の人と交わることがほほほほはない状況」で、「教員採用試験を受ける学生は非常にビュアに物事を考えていて、いろいろな子がいる。不登校を経験したり、通信制の高校で学んだりした学生もいる」と言っていました。また、「学校でうまくいかない子は、いじめなどハッキリした理由はないが、ストレスを感じている」と言いました。

「お子さんの居場所をつくりたくてフリースクールを始めた」と紹介した方もいました。「不登校の子は塾にも行かない。ごはんをつくってもらえない子が友人の家を渡り歩いているということを知って、子どもにおいしいものを食べさせたいと思い、子ども食堂をやる気になった」と語った女性もいました。

ほかの方々の意見も紹介します。

・教育のセーフティネットをめざしたい、人間関係の学びを習得したい、と思い、不登校の研修会に参加した。

・放課後に保育活動をしているが、子どもたちを見て

いると学校の生活になじめない感じがする。学校には行きたくないが、フリースクールには行きたい。学校にもできることなら行きたいが、行事の時には行きたくないという。

・文化祭の時には顔が疲れ切って帰ってくる。

「わたしだけ授業に入れなくて、体育館を走ってきたんだよ。疎外されている感じ」という。

・学童保育は、働く親の生活支援であるが、新潟市は大規模化が進行。40名を超えたら分散させなさいという指導があつたが、いまは、だんだん稀薄になつてきている。

・いまは発達障害と診断される子が多くなり、需要が増えている。発達障害の子は病名がつくと安心し、そこから先に進まない。不登校の子も「不登校」と決まると安心し、そこでストップしてしまう。30人学級では二人平均で不登校だが、指導の基本は「学校に戻せ」である。

・小規模校は子どもの事情がよくわかるから寛容だが、大規模校はそうはいかない。しかし、小規模校は生徒同士の関係がいったんマズくなると、修復に時間がかかる。一人ひとりの子に合う学校をめざさないといけない。学校に合わせる子どもではなく、子どもに合わせる学校を考えるべきだ。

・いま、学校では、先生は教えるのではなく、コンピュータの指導をしている。みんなで幸せになる道ではなく、個々が一人で幸せになる自助の道を教えこもうとしている。

・いま、学校はタブレットの使い方ばかりを指導しているような気がする。新潟市はタブレットの使用率が高いが、授業はおもしろくない。子どもたちは静かにタブレットを操作している。とにかく、ものすごく静かで、「やっつてる感」が漂っている。

新潟市は文部科学省の2022年度の問題行動・不登校調査によると、暴力行為は全国の政令市で最も多く、不登校も政令市で最多です。いじめの認知件数も、

6年連続、最多の状況にあります。

当日参加された方々は、そうした現状を憂慮し、フリースクールや不登校を考える会、子ども食堂などで、子どもたちの成長を支えています。秋葉区の児童館建設誘致運動もその一環といえると思います。

アーベルの会（新潟県子ども発達と不登校を考える会）が提出した資料に、「不登校、大半は親の責任」という東近江市長の発言が載っていました。「大半の善良な市民は、嫌がる子どもを無理して学校に押し込んででも義務教育を受けさせようとしている」「フリースクールは安易に考えちゃいかん」などの発言も載っていました。「この市長の発言は、学校を苦しい場所と認識しているものだ」という批判がありました。

（おのづかつねお・所員）

## 空から魚が降ってきた

烏屋野潟のほとりに、多くのシラサギが生息しています。岸辺の水草の上に陣取り魚の影を探しています。また、上空には鳶が旋回しています。これらの鳥たちは、烏屋野潟に棲んでいる魚を摂取して生きています。

この夏、烏屋野潟に架かる弁天橋を自転車で行く中、空から魚が降ってきました。それが、私の目の前の歩道に落ちました。橋を渡る前に、魚を鷲掴みにしてよたよたと飛行している鳶の姿を目撃しました。無事に運べるか心配していたのですが、案の定、獲物を落としてしまったのです。

弁天橋の在る新潟市長潟地区には専門学校が多くあります。そこで学ぶ若者は、橋を往來します。その事件にたまたま遭遇した若者は、歩道に落ちている30センチほどある魚の姿を見つけて不思議がっていました。

このように、烏屋野潟周辺には生きるための数多くの営みがあり、ドラマが展開されています。

（小東）